マイマイの子守唄

作・画　渡辺　あきら

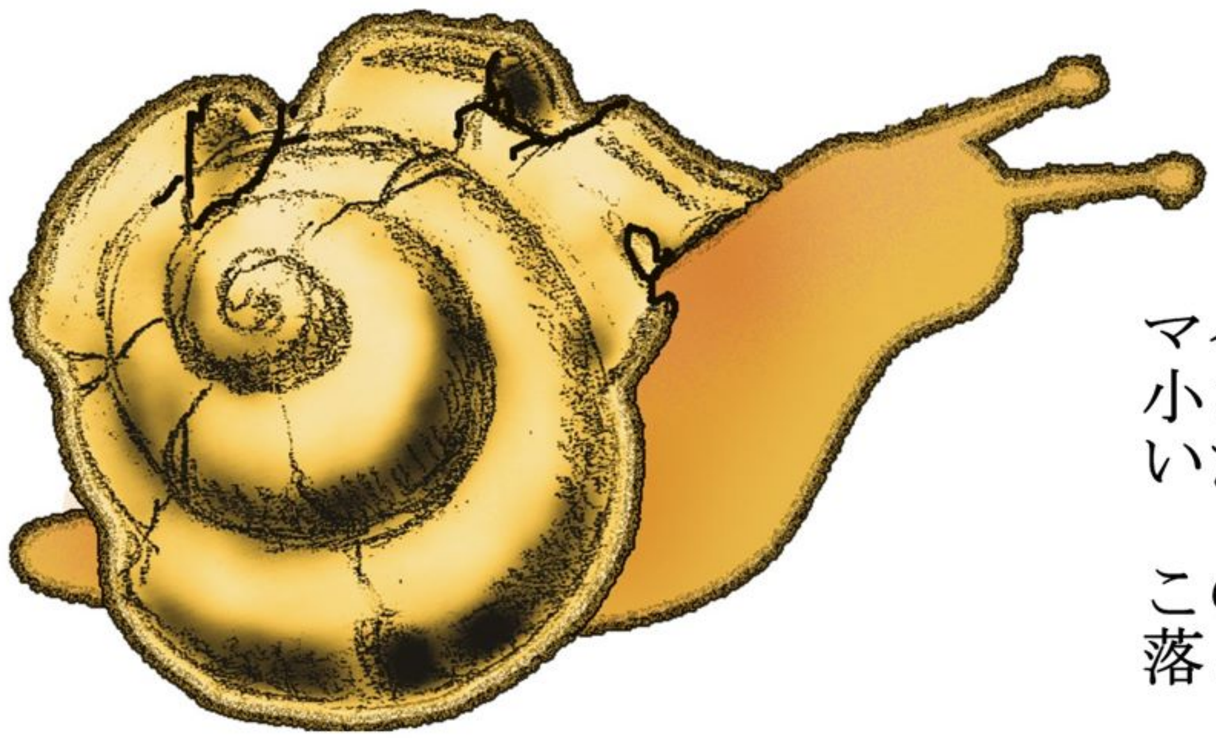
誰も知らない　遠い　遠い山奥に　あじさいの森は　ありました

今は６月です　森の　あちこちで
あじさいたちが　美しい花
を　さかせています

これは　そんな　あじさいの森にすむ
１匹の　カタツムリの　お話です

このカタツムリを
マイマイと　呼ぶことにしましょう

マイマイの 背中のカラは　ひどく　ひび割れています



マイマイは
小さいときに　別の森から
いたずらカラスに　くわえられて

この　あじさいの森に
落とされたのです

カラスにとっては　ただの遊び　だったのかも　しれませんが

マイマイに　とっては　一生を変えるほどの　できごとでした

カラのキズは　今でも時々痛んで
マイマイを　眠らせない　こともあります

風が吹くと　カラのひびわれから　冷たい空気が　入ってきて

ヒュールルー　ヒュールルーと

ぶきみな音を　たてて　マイマイを　こごえさせます

友だちは　いません　マイマイは　いつも　ひとりぼっちです
まわりの　カタツムリたちは　マイマイを　きみわるがって　近づいてきません

マイマイが　近づくと　みんな逃げてしまいます

ある日の　ことです
その日は　朝から　雨が　ふっていました

カタツムリは　雨が　大好きです

森中の　カタツムリたちが　雨をあびて　よろこんでいます

あじさいの　葉っぱの上で　はしゃいでるカタツムリの　家族が
あちこちにいます

マイマイは　おとうさんや　おかあさんの　ことを
何も　おぼえていません

それどころか　マイマイは　小さい頃の事を
何も　おぼえて　いないのです

いたずらカラスに　空から　落とされて　カラが割れて　しまったときに
みんな　わすれて　しまったのです

「おとうさんと　よんでみたい」

「おかあさんと　よんでみたい」

「だれかに　マイマイと　よばれてみたい」

・・・それだけで　幸せ・・・

あれこれ　思いながら　すすんでいるうちに

マイマイは　いつのまにか　あじさいの森の　いちばん　はしっこの
川の　見える場所に　出ていました

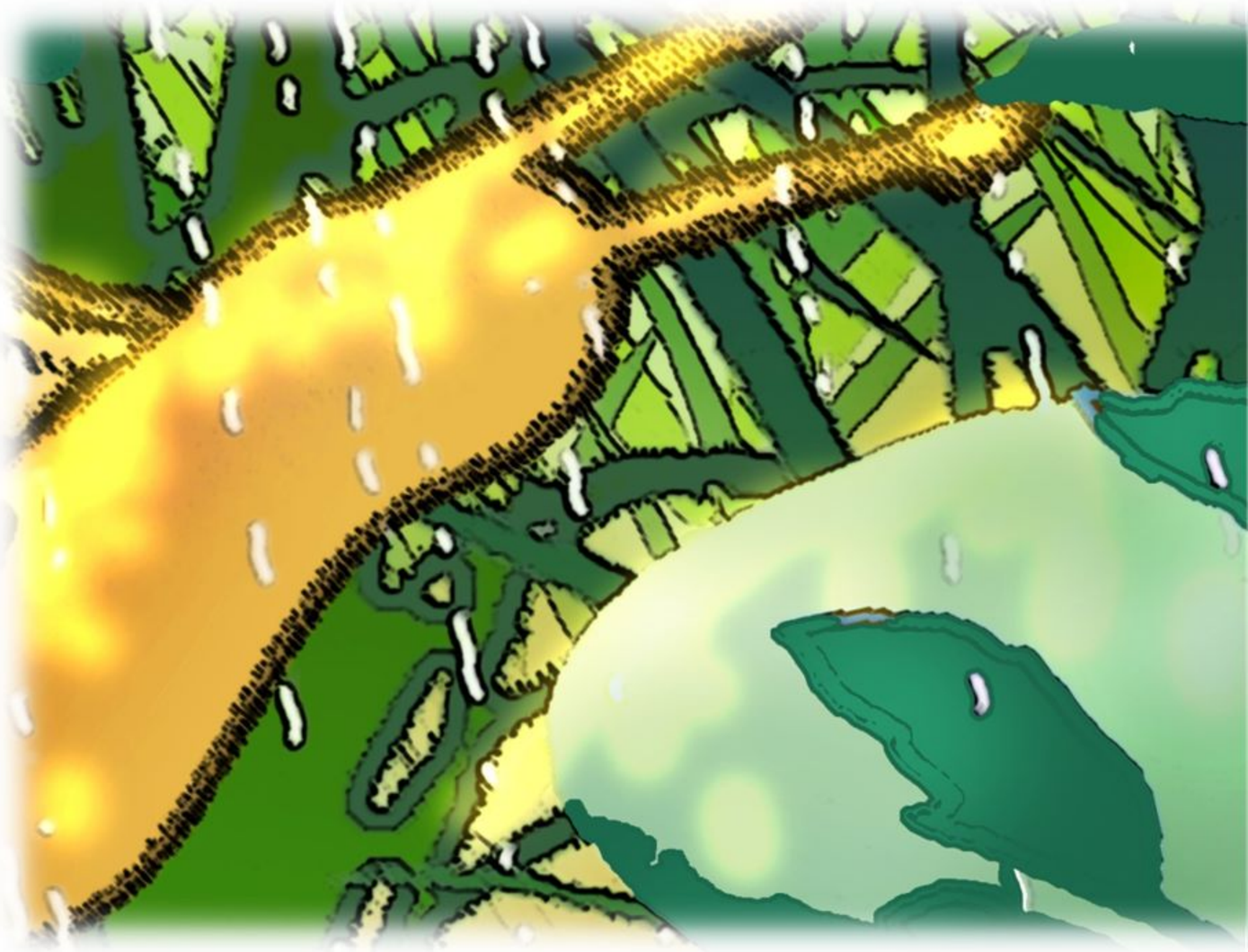
マイマイは　あじさいの森に　落とされてから
こんなに　遠くまで　きたことは　ありませんでした

カタツムリは
動くのが　とてもおそい
生き物です

いそいで　帰らないと
明るいうちに
いつもの　あじさいの木の下の
ねどこに　戻れなくなって
しまいます

「そろそろ　帰らなくちゃ」

マイマイが　帰ろうとした
そのときです



マイマイの　目に　すぐ近くの　草むらで
何か　まるいものが　雨に　ぬれているのが　見えました

よく見ると　何かの鳥の　タマゴでした

すぐ後ろの　木の上には　大きな鳥の巣が　見えます

「あそこから　落ちたのね」

マイマイは　ほほを　タマゴに　あててみました

「まだ　あたたかい　生きている」

マイマイは　タマゴを　巣に　戻してあげたいと　思いました

でも　カタツムリの　マイマイに　そんなこと　できるはずありません

マイマイは　タマゴを見つめながら　じっと考えました

雨は　降り続いています　このまま　ほうっておけば
タマゴは　つめたくなって　死んでしまうでしょう

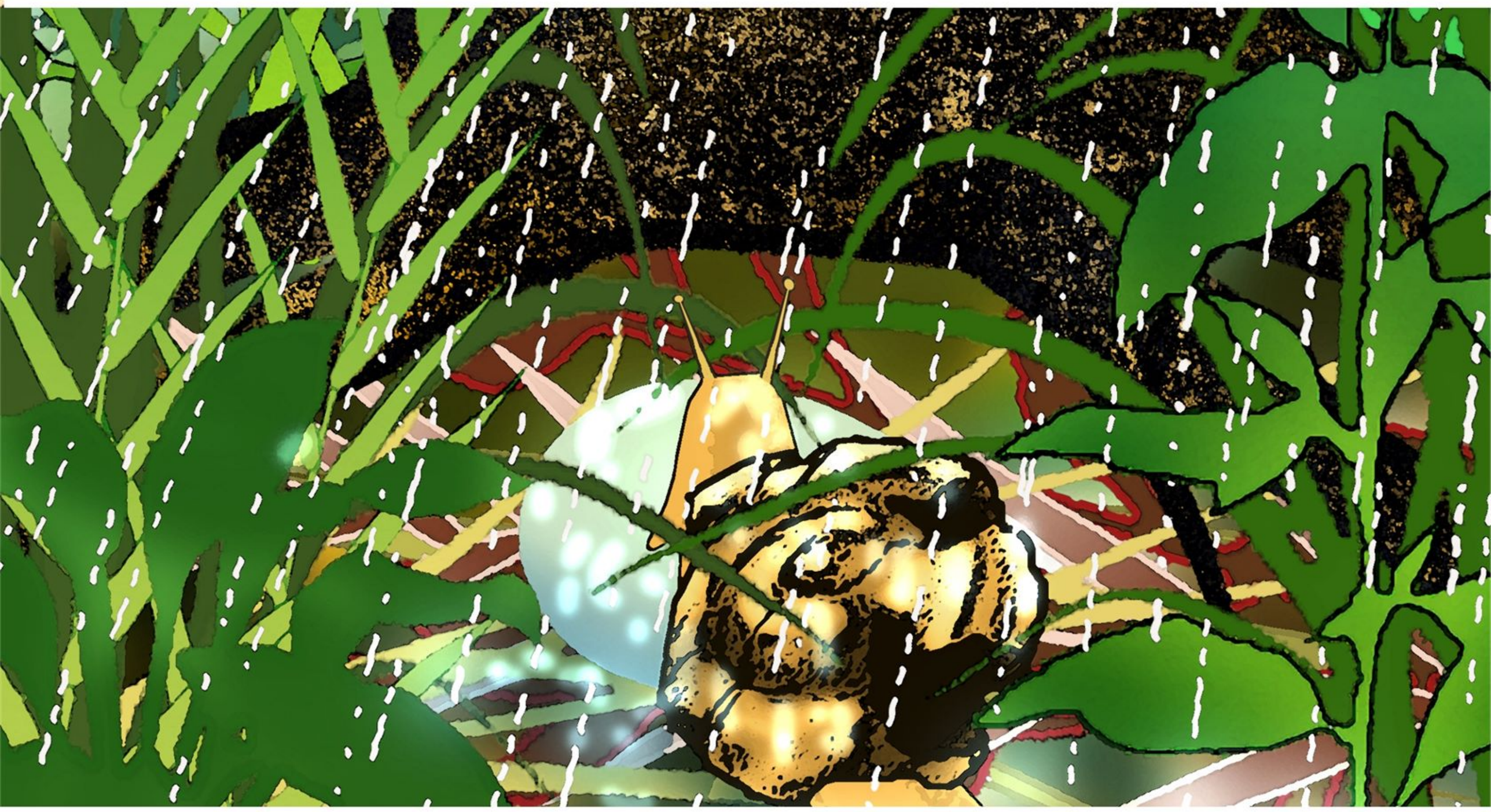
マイマイは
空を　見上げました　そして

おかあさん鳥が　帰って来
ないかと　さがしました

でも　見えるのは
はいいろ空と　雨つぶばかり

「だめだ　このままだと
　タマゴが　死んじゃう」

マイマイは　自分のからだを　タマゴに　おしつけて　みました
そしたら　タマゴが　ちょっとだけ　前に　ころがりました



マイマイは　そのまま　ゆっくり　ゆっくり　タマゴを　ころがして
木の根もとの　雨のあたらない場所に　おしいれました

そして　近くの　木の下から　かわいた葉っぱや　枯草をさがして
タマゴに　かけて　あげました

動くのが　おそい　カタツムリの　マイマイにとっては
とても　大変な　しごとでした

いつのまにか　雨は　あがって　西の空を　うっすらと
夕日が　そめていました

マイマイは　いつもの　あじさいの森の　ねどこに　帰
るのを　あきらめました

そして　タマゴに　よりそうと

「だいじょうぶ　明日は　おかさん鳥が　帰ってくるから」

そう　話しかけると　そのまま　目をつぶりました

川のほうから　すずしい風が　吹
いてきて　マイマイと　タマゴに　あたります

マイマイは　タマゴに　風が　あたらないように
すこし　からだを　かたむけました

そして　そのまま　眠ってしまいました

風は　マイマイの　背中のカラの　ひびわれから　中に入り

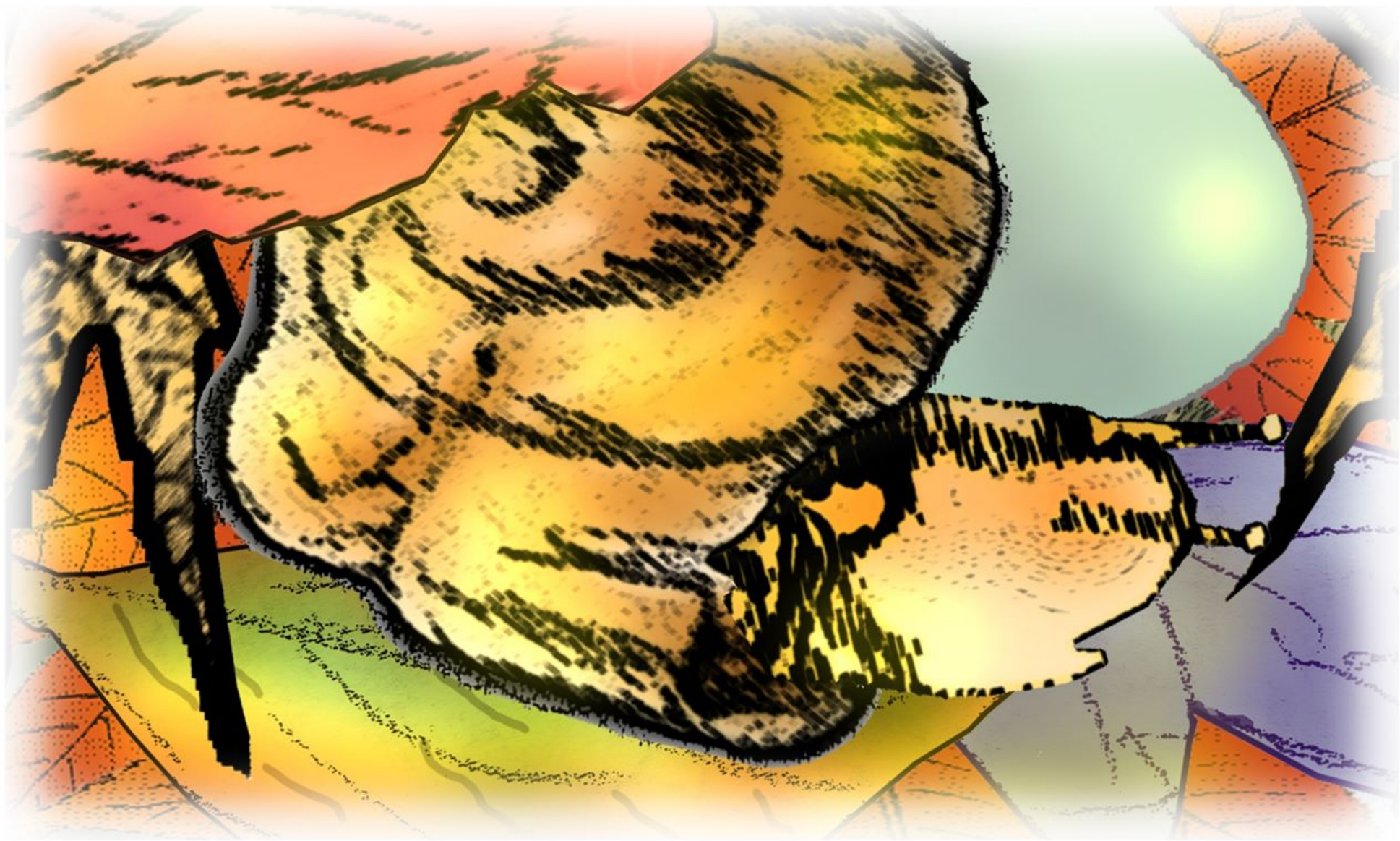
ヒュールルー　ヒュールルーと

今日は　やさしい音を　かなでました

それから　何日も　何日も　たちました
でも　おかさん鳥は　もどってきません

マイマイは　来る日も　来る日も　枯れ草や　枯葉を
毎日　せっせと　新しい　ものに　かえて

タマゴの　よこで　眠りに　つくのでした



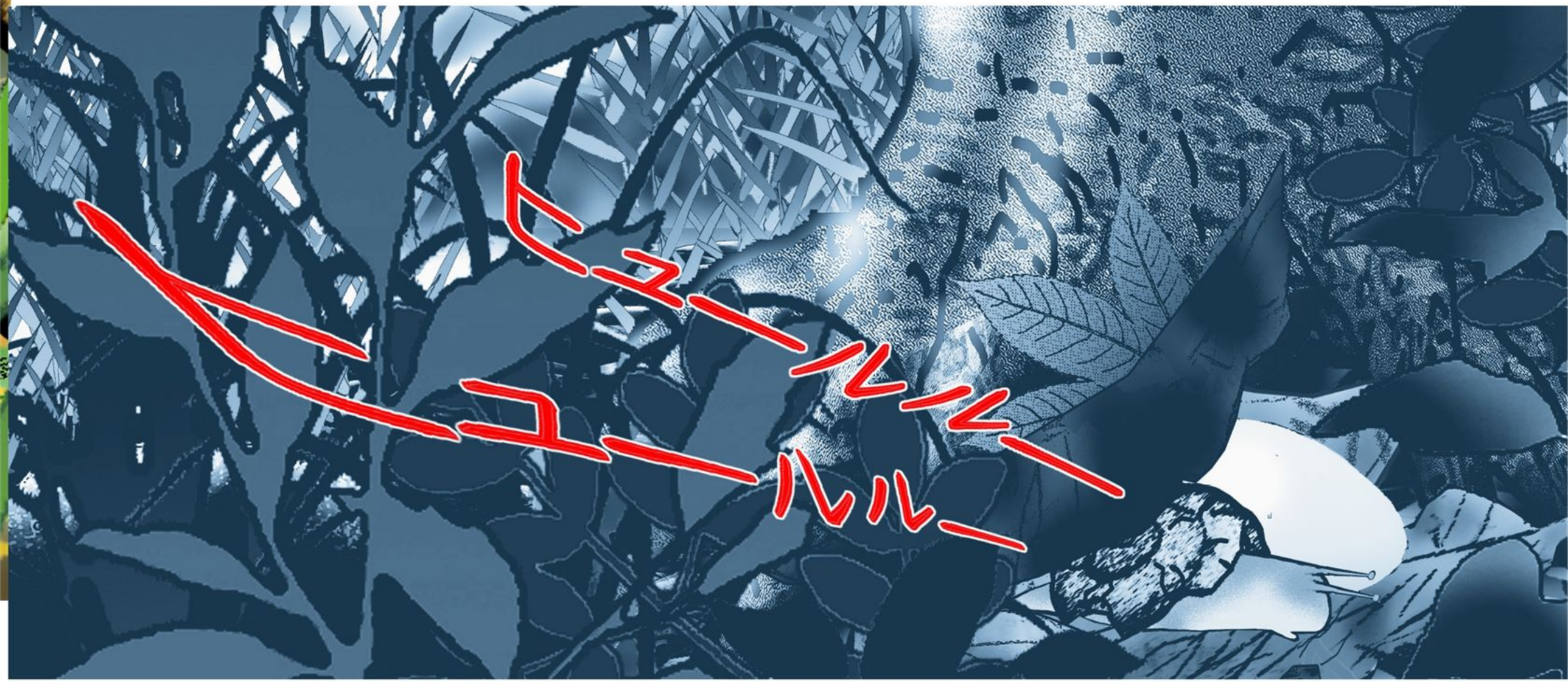
マイマイは
なんだか
とっても
幸せでした

ある日の　夜のことです
マイマイは　いつものように　タマゴに　よりそって　ねていました

その夜も　川のほうから　風がふいてきて　マイマイの
背中のカラの　ひび割れから　中にはいり

ヒュールルー　ヒュールルーと

音をたてています



でも　今夜は　もうひとつ　何か　別の音が
マイマイの　耳に　聞こえていました

「何の音・・・かしら・・・・？」

マイマイは　耳をすまして　あたりを　見わたしました

すると　その音は
タマゴの中から
聞こえている　ようなのです

ゴロゴロ　ゴロゴロ・・・と

タマゴの　ほうから
かすかな音が　聞こえます

「あっ！　動いてる！」

そうです

タマゴの中で　ヒナが　動いている音　だったのです

「もうすぐ　赤ちゃんが生まれるんだ！」

マイマイは　まるで　自分の　赤ちゃんが　生まれるみたいに
うれしくて　うれしくて　とびあがりたい　ような　気持ちでした

「そうだ　何か食べ物を　さがさなくちゃ」

朝になると　マイマイは
ヒナが　タマゴから　かえった　時のための
食べ物を　さがしに　出かけました

でも　マイマイは
鳥の赤ちゃんが　何を食べるかなんて　しりません

それに　タマゴの中から
どんな鳥の　ヒナが　生まれるのかも　しらない　のです

それなのに　マイマイは
毎日　河原や森に　出かけて

ヒナが　食
べられるか　どうか　わからない
木の実や　コケを

いっしょう　けんめい
自分の　からだで　おして

タマゴがまってる
河原の　木の根元
まで　はこぶのでした

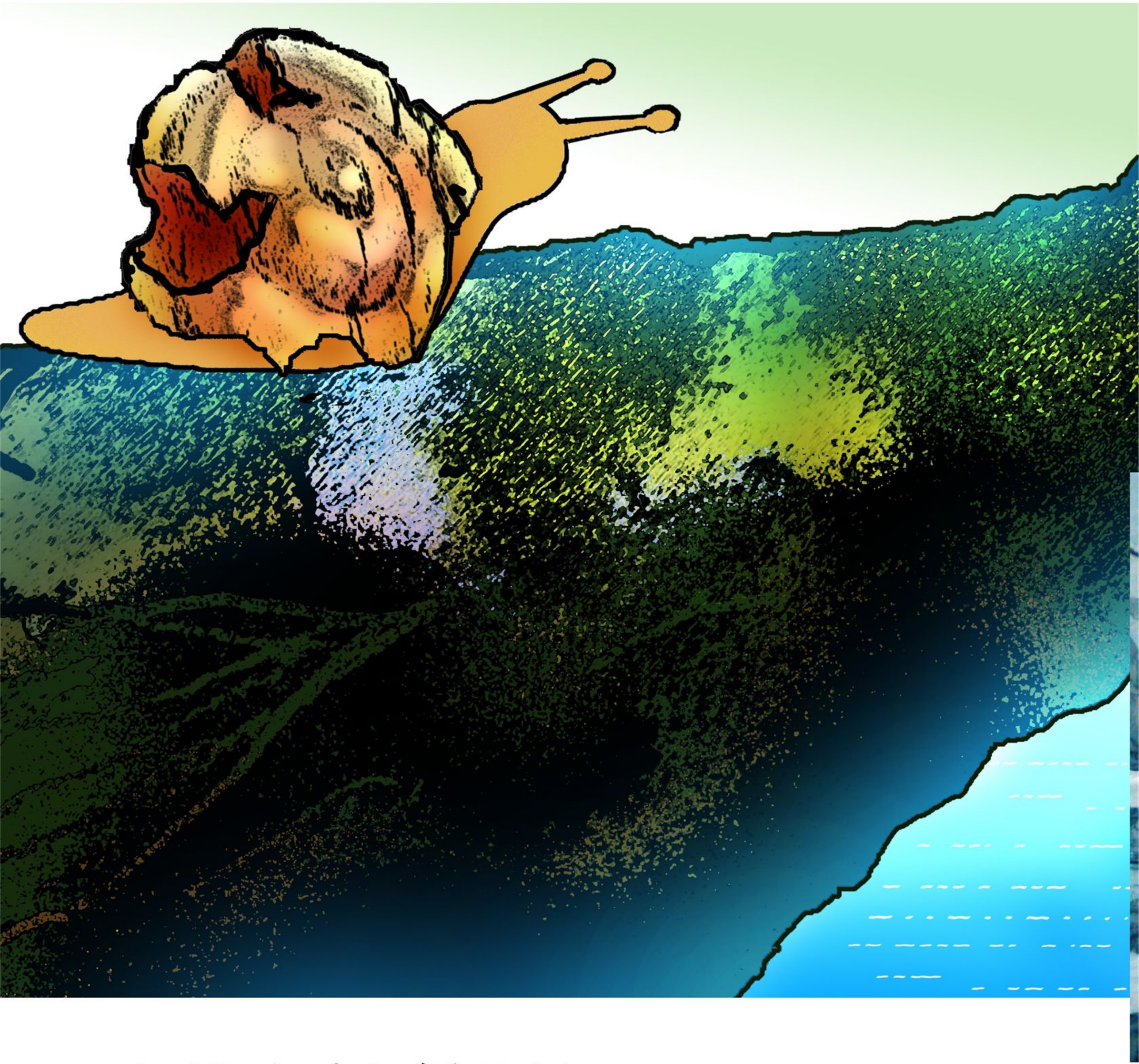
ヒナの食べ物を　さがしはじめてから　５日目のことでした

マイマイの　目の前に　向こう岸の　林の大きな木が　倒れていて
まるで　橋のように　なっている　ところが　あらわれました

その上には　ぎっしりと　おいしそうな　コケがはえています

マイマイは　その大きな木を　ゆっくり　わたりはじめ　ました

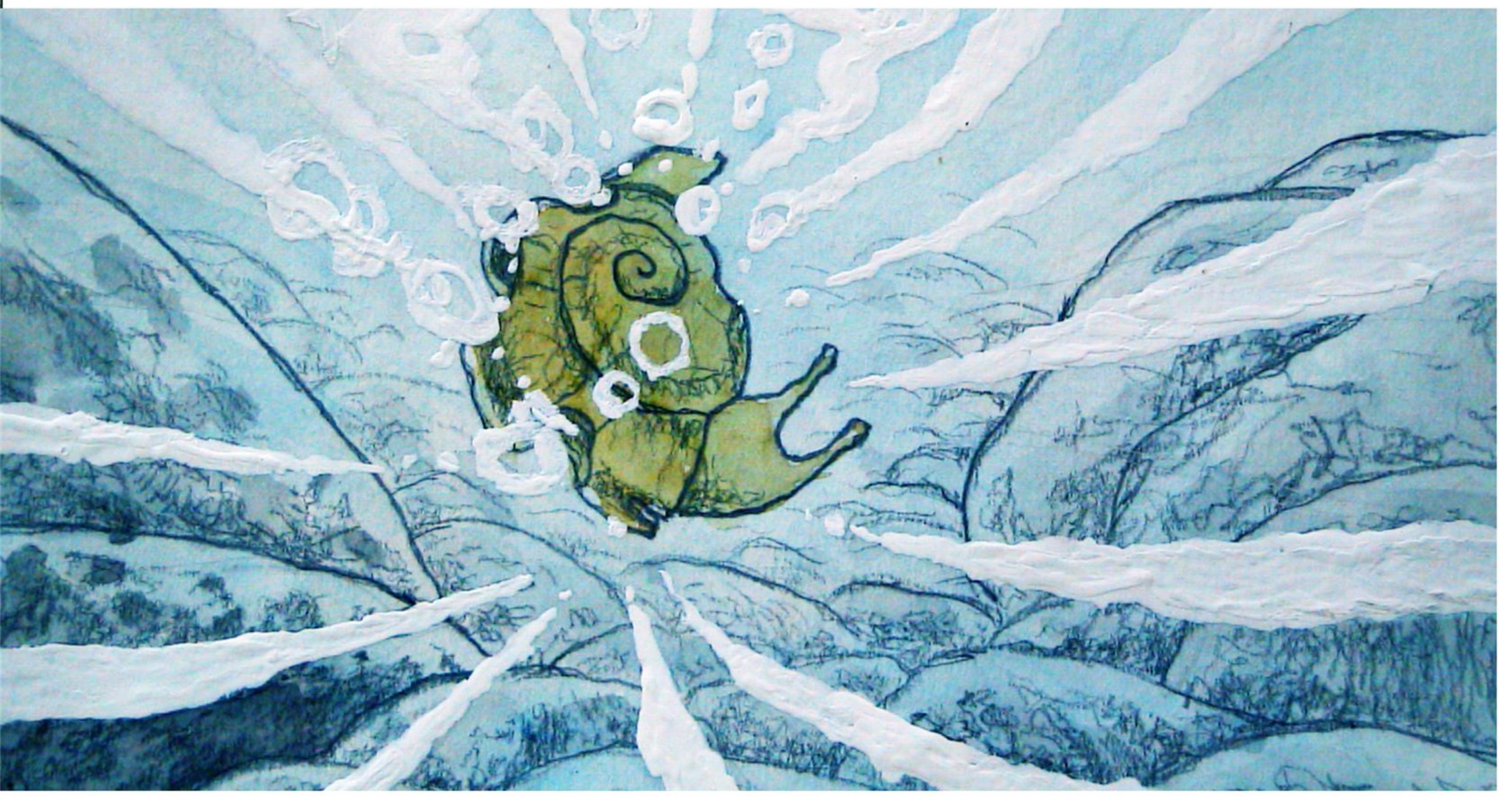
「まっててね　もうすぐ　お母さんが　おいしいコケを
　持って帰るから・・・」



マイマイは　心の中で　自分のことを
お母さんと　よんだことに　気づいて　ほほを　赤らめました

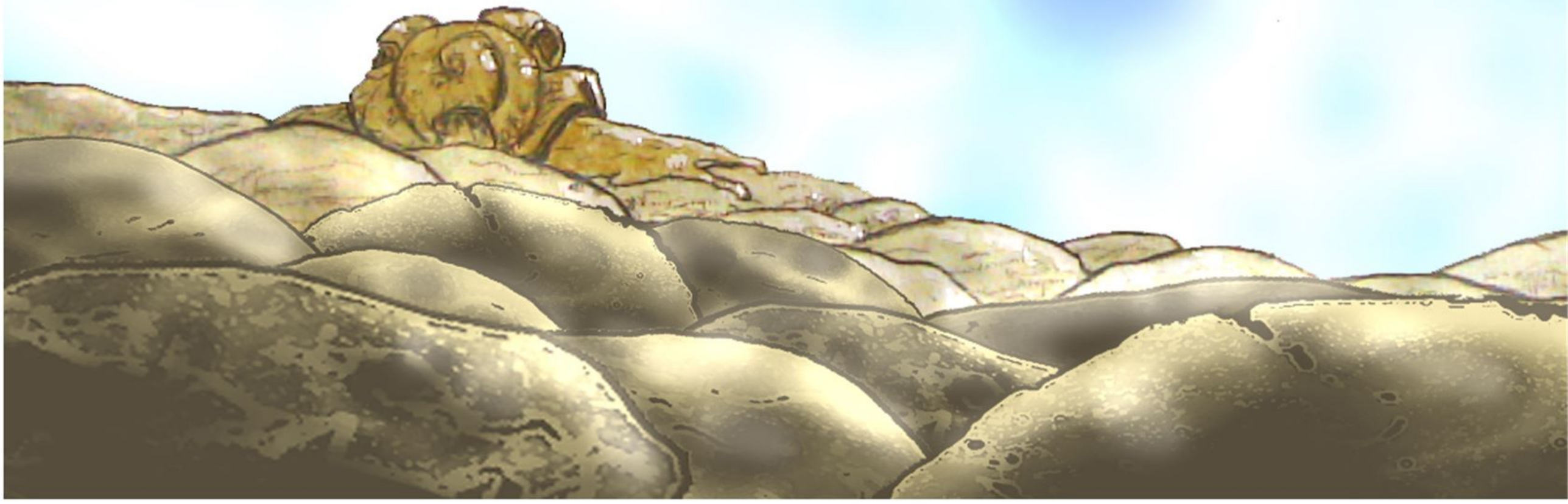
そして　もうすぐ　コケの　はえてるところに
つくと　思った　時です

なんという　ことでしょう
マイマイの　からだは　すべって　大きな木
から　はなれて　しまったのです



マイマイは　そのまま　川に　落ちてしまいました

ゴオーという音と　ボコボコという音が　マイマイの　耳に聞
こえました
マイマイは　そのまま　気をうしなって　川の流れに　もまれながら
下流へ　下流へと　流されて　いきました



何時間も　流された　マイマイは
やっと　流れの　ゆるやかな　あさせに　うちあげ　られました

でも　マイマイは　動きません　気を　うしなった　ままです

今は　８月です

ぎらぎらと　かがやく　夏の太陽が　マイマイの　からだを
ようしゃなく　てらして　います

マイマイは　あまりの痛さに　目を　さましました

「うっ・・うごけない・・・」

マイマイの　ボロボロの　カラから出てる
やわらかい　からだは

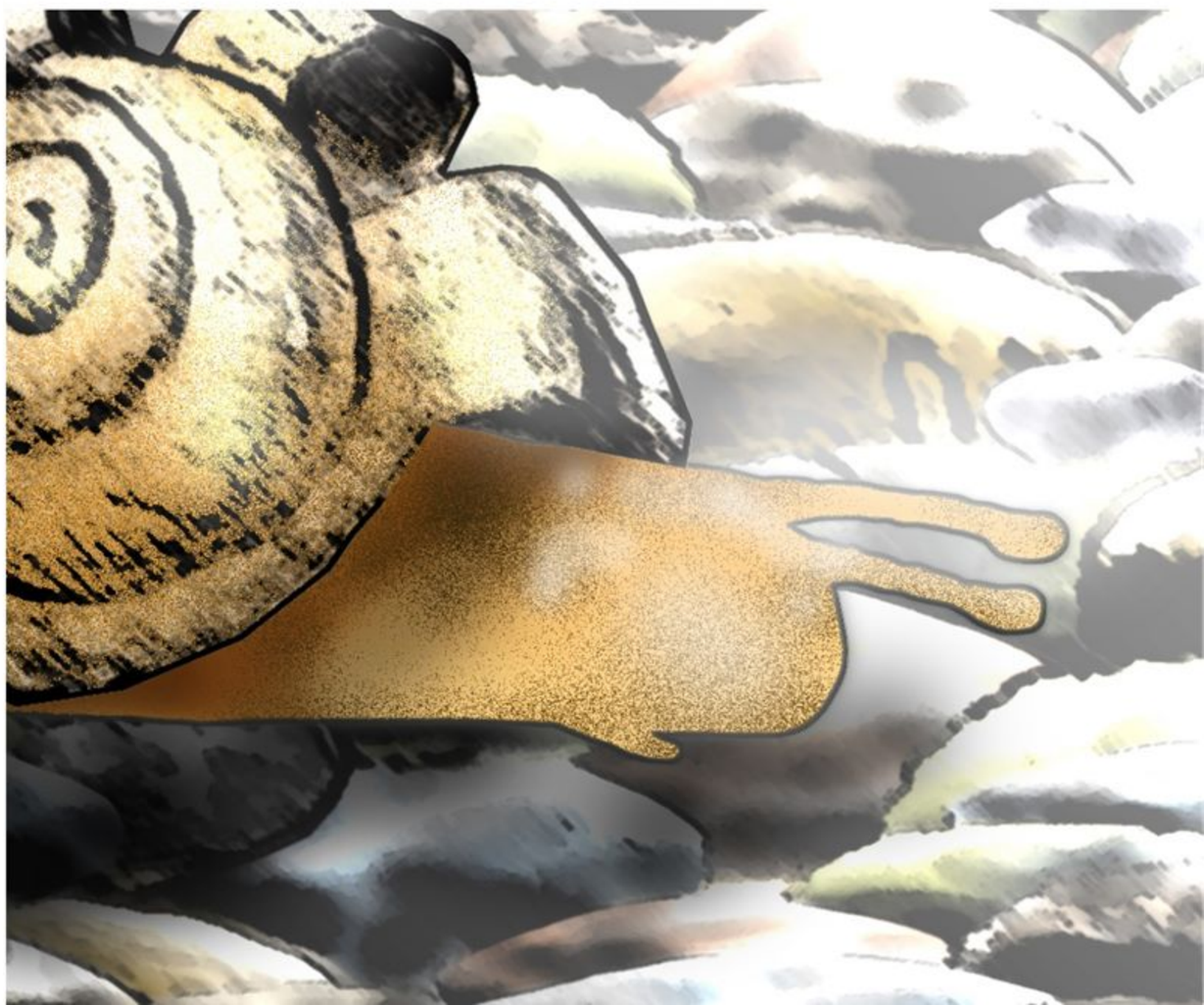
石に　べったりと　はりついて
太陽に　じりじりと　焼かれています

「いっ・・痛い・・・・
　どうして　こんなことに・・・？」

「早く・・・　　帰らなくちゃ・・・　早く・・・　　」

マイマイは
石から　からだを　はがそうと
ひっしで　がんばりました

でも　いくら　力をいれても
からだは　はがれません



「わたしは　このまま　死んでしまうの？」

「タマゴから　かえった　ヒナは
　どうなってしまうの？」

そう　思ったとき
マイマイの　目から　涙が　こぼれました

涙がひとつぶ　石と　からだの　あいだに　落ちて
石に　はりついていた　からだが
少しだけ　はがれました

でも　もう涙はでません

マイマイの　からだは　それほど　かわききって　いたのです

「もう　だめだ・・・・」

そう　思ったときです

空から　ぽつぽつと　雨が　ふってきたのです
雨は　しだいに　大ぶりに　なって
あたり　いちめんを　ぬらし　はじめました

マイマイは　やっと　石から　からだを　はがすことが　できました

「待っててね　わたしの　あかちゃん」

マイマイは　すぐ　川上に　むかって　歩き　はじめました

でも　マイマイは　どのぐらい　下流まで　流されたのでしょう

タマゴが　待ってる　場所へは　あと　どのぐらい　歩けば
たどりつける　のでしょう

気を　うしなっていた　マイマイには　けんとうも　つきません

ピンポン玉　ぐらいの　大きさしかない　マイマイは

同じぐらいの　石や
その　何倍　何百もある　河原の石を
ひとつひとつ　のりこえて　上流を　めざしました

ひとつ　乗りこえるのに　一日かかるような
大きな石が　いくつも　ありました

河原がとぎれて　いるところは　がけをよじのぼって
林の中を　歩いて　上流を　めざしました

つかれると　ちょっと　ねるだけで
ほとんど　夜どうし　歩き　つづけました

いつのまにか　季節は秋に　なっていました

今は　11月の　終わりのころ　です

岸辺の　木立の　枯葉が　木枯らしに　ふかれて　マイマイに　あたります

マイマイの　背中のカラの　ひび割れから　風がふきこんで

ヒュールルー　ヒュールルーと

いつもより　大きな音を　ひびかせて　います

マイマイは　とても　つかれて　いました
それも　そのはずです

カタツムリは　冬眠する　生き物です

寒くなると　土や　葉っぱの下に　もぐりこんで
春まで　眠るのです

でも　マイマイは　ねむいのを　がまんして　歩き続けました

それでも　あじさいの森は　見えて　きません

木枯らしが　向かい風となって　マイマイにふきつけ
さらに　マイマイの　歩みを　おそくします

「あいたい・・・わたしの・・・
あかちゃん・・・」

12月になった　ある日　とうとう　雪が　ふってきました

それでも　マイマイは　こおりつきそうな　石の上を
わずかづつ・・・

それこそ　一時間に　1cm・・・
・・あるかないか　ぐらい　ですが

前にすすんで　いました

「あいたい・・・わたしの・・・
・・あかちゃん・・・・」

「あいたい・・・・」

「あいたい・・・」

「あい・・・た・・・い　」

「あ・・い・・・・・　　」

「・・・・・」

マイマイは　ついに　動けなく　なりました

そして・・・

深い　眠りに　入りかけた　とき

コツコツと　誰かに　カラを　つつかれて
マイマイは　目をさまし　ました

カラを　つついて　いたのは
コサギ　という鳥の　黒くて長い　クチバシでした

「なんだ　タニシか　と思ったら　カタツムリか」

マイマイは　小さな　うめくような　声で

「あ・い・た・い・・・・」

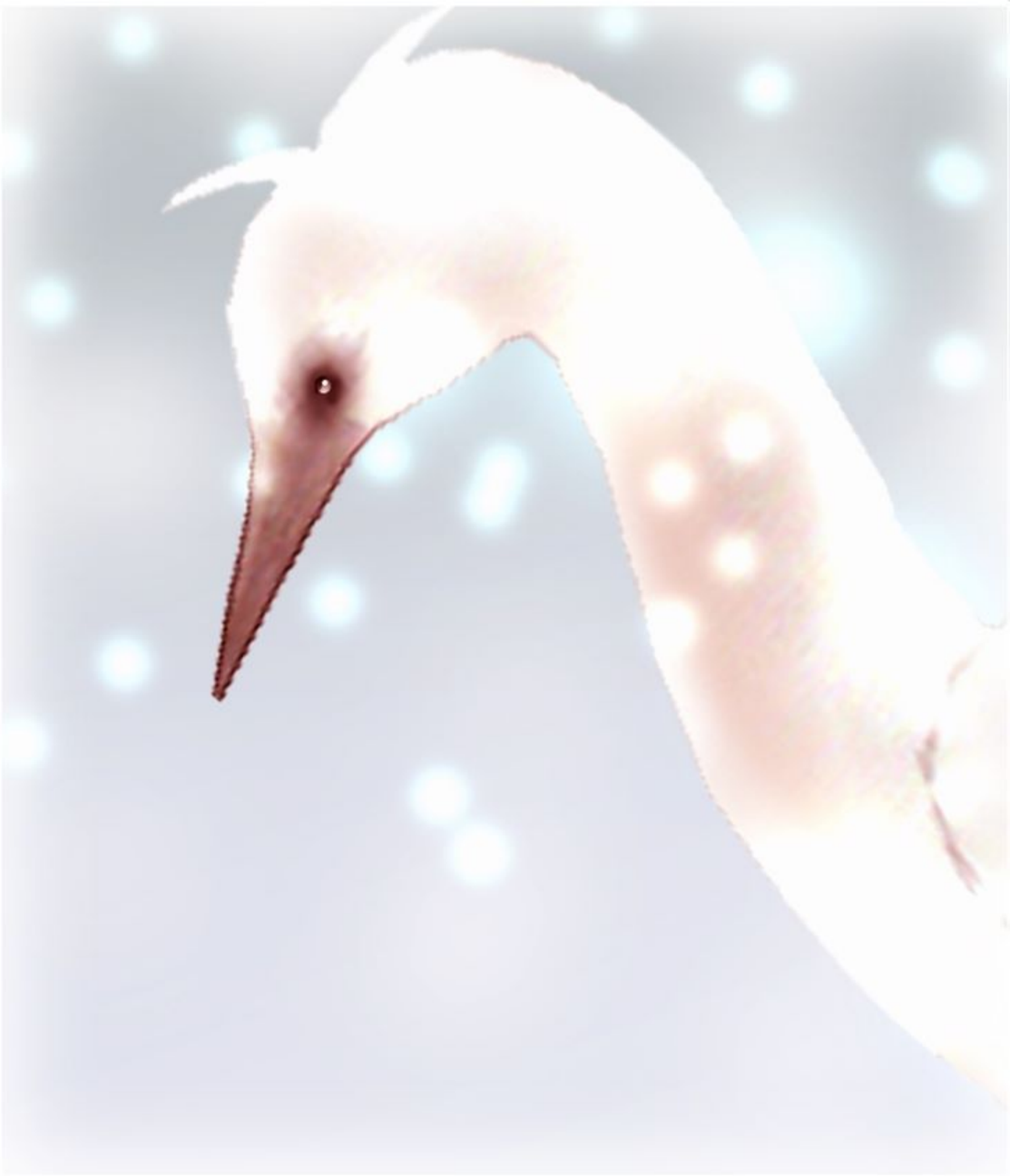
「あ・い・た・い・・・・」と

くりかえし　言っています

コサギは　聞きました

だれに　会いたいんだい？」

「あじさいの森に・・・
おいてきた・・・・
・・・わたしの・・あかちゃん・・・」



「ここが　あじさいの森　だけど」

「えっ？」

マイマイは　すぐよこの森を　見ました」

「こっ・・ここが・・あじさいの森・・・？」

そこには　葉が落ち　むきだしの木に
白い雪がまう　あじさいの森が　ありました

「おれも　この森の　はじっこの河原で　生まれたんだ

でも　おれには　親はいねえ　タマゴをわって　外に出ると
そこには　だれも　いなかたんだ」

「そんなに　大きいのに・・・・・
どうやって　生きてきた　のですか」

「ああ　うんよく　おれが生まれた　木の根元には
たくさんの　枯れ草や枯葉が　たまっていて
コケも　生えていたんだ
その上に　木の実がいっぱい　落ちていて　その木の実に
虫が　わいていたんだ

それを食べて　おれは大きく　なったのさ」

その話を　聞いているうちに

マイマイの目から
おおつぶの　涙が　こぼれてきました

そして・・・・・『わたしの　あかちゃん』と
さけび　たかったのです

でも　声が　出ません

ただ　ただ　あとから　あとから

涙が　あふれて　くるだけです

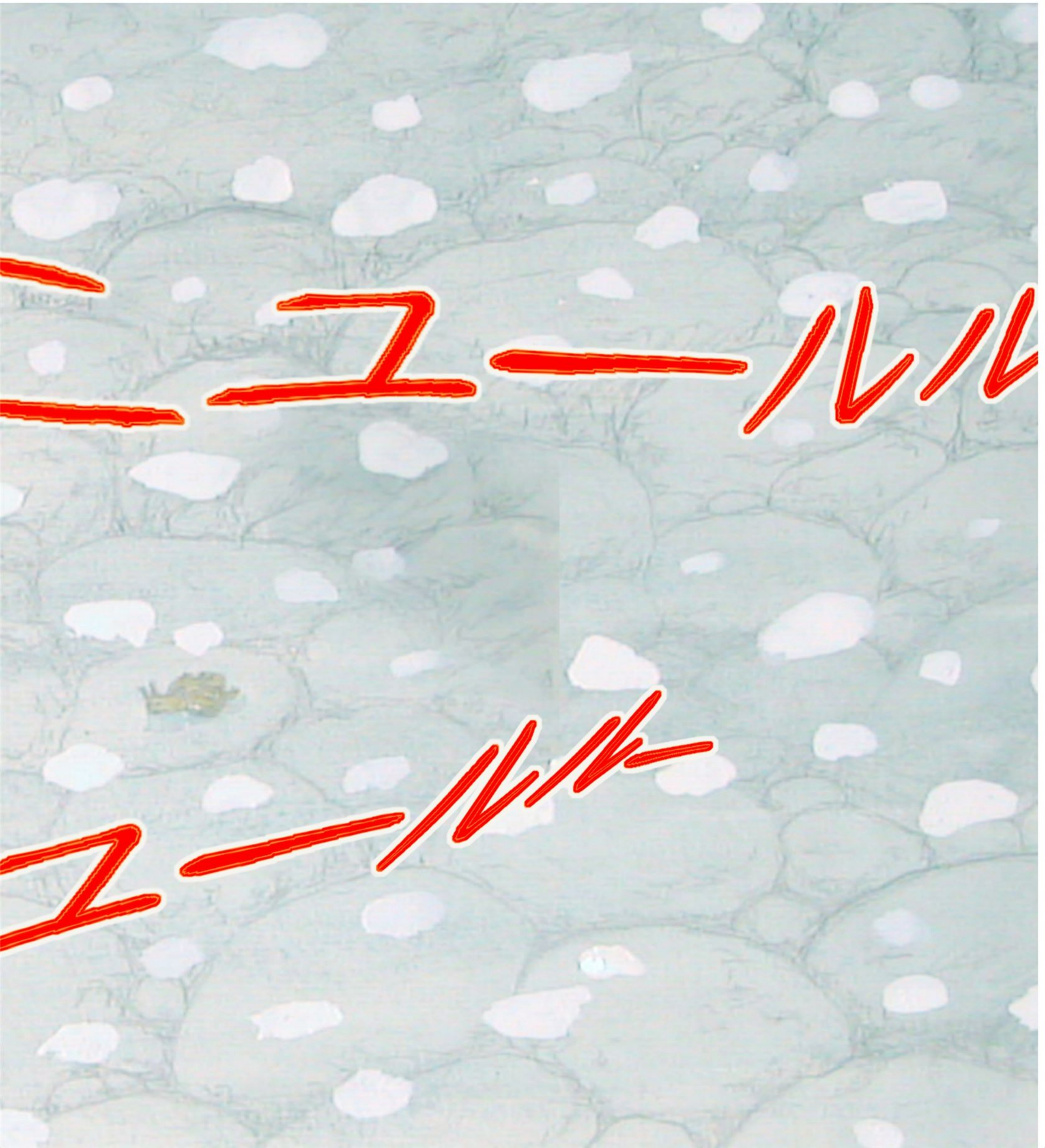
「なに　泣いてるんだい　わらえる　話じゃないか」

そのとき　風が　ふいてきました

風は　マイマイの　背中のカラの　ひび割れから　中に入り

ヒュールルー　ヒュールルーと

河原中に　鳴りわたりました



その音を聞いた　コサギは　かたまったように　うごけなくなって

じっと　マイマイを　見つめています

そして　今度は　コサギの目から
おおつぶの　涙が　こぼれて　きました
コサギは　タマゴの中で　聞いた　その音を　おぼえて　いたのです

コサギは　言いました

「おっ・・・おかあさん」

マイマイも

「あいたかった　死ぬまえに　あえて　よかった」

と言いました

「死なせる　ものか　今度はおれが
　おかあさんを　あたためて　あげる」

コサギは　そう言うと
マイマイを　大きな　白い羽で　おおうように　だきしめました

マイマイは　あたたかい　コサギの　ふところの中で
とても　幸せでした